

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

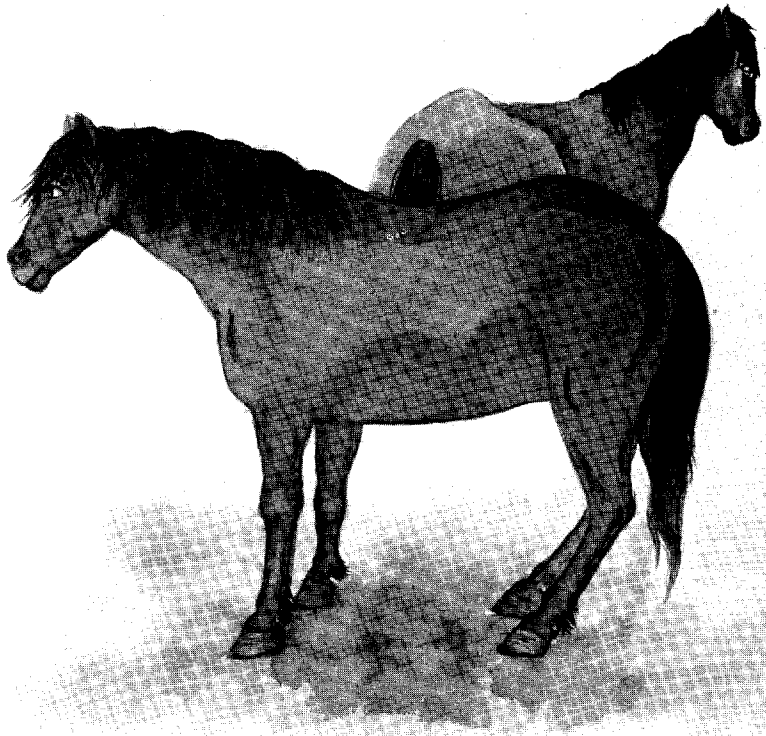
B6判
三五二頁
三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式日 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

季刊 連句 第28号



東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-233-3741-2

第5回国民文化祭・愛媛90文芸大会連句部門募集案内

作品 連句形体(半歌仙)。未発表作品(厳守)とし、同一座につき二巻まで応募できる。花の座を含む春の句二句、総じて四季を詠う。脇起は不可。

応募料 一巻二、〇〇〇円(郵便小為替を作品に同封)。海外投稿者は無料。応募全座全員に入選作品集を無料配布。

応募方法 四〇〇字原稿用紙(B4判)を使用。なお、作品欄外に代表者の郵便番号・住所・氏名(筆名使用の場合)、本名を併記し、ふりがなをつけること。年齢・性別・職業・電話番号・大会当日及び吟行の欠を楷書で明記し、応募料を添えて郵送のこと。また、投稿用紙裏面に大会当日及び吟行希望者(連衆)の欠数、並びに出席者氏名・住所・電話番号を記入。なお、海外投稿者の作品もすべて日本語表記に限る。

応募先 千七九〇 愛媛県松山市・番町四丁目四十二 愛媛県庁内

募集期間 第5回国民文化祭愛媛県実行委員会事務局「文芸大会」連句係

審査員 平成二年二月一日(木)〜四月二十日(金) (当日消印有効)

賞

阿片瓢郎・赤田聰雨・秋元止江・磯直道・今泉宇涯・宇咲冬男
大林柚平・岡本春人・草間時彦・国島十雨・小林しげと・重松冬
楊・近松寿子・土屋実郎・永田黙泉・東明雅・福井隆秀・松永
静雨・松村武雄・宮下太郎(五十首順・予定)

〔連句大会〕

(入場無料)

文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・愛媛県知事賞
愛媛県教育委員会教育長賞・松山市長賞・松山市教育委員会教育
長賞 第5回国民文化祭愛媛県実行委員会賞ほか(予定)

日 時 平成二年十月二十日(土) 午前九時〜午後四時三十分

会 場 子規記念博物館 千七九〇 愛媛県松山市道後公園二丁目三〇
J R松山駅より市内電車で十五分(道後公園前下車)

記念講演 講師 暉峻 康隆 先生

〔合同文芸大会・吟行〕(入場無料)

日 時 平成二年十月二十二日(月) 午前十時〜正午

会 場 愛媛県民文化会館メインホール
千七九〇 愛媛県松山市道後町二丁目五十一

芭蕉の後継者たち (南柏雑記 26) 1

「鶯の羽も」の巻 鑑賞 (VII) 東 明雅 2

校合報告 (半歌仙 秋麗) 鈴木春山洞 4

鉋の刃の砥ぎ方 (二十韻 暮の市) 式田和子 6

校合の過程 (歌仙 聖夜なる) 坂本孝子 10

「蓑虫」付勝練習二十韻 14

第三十二回 猫蓑会 歌仙六卷 16

捌 氏原正雄 下坂元子 中川 哲

東 明雅 福井隆秀 山崎一恵

花の句について 東 明雅

逗子連句会 歌仙二卷 捌・文 東 明雅 本屋良子 22

渋谷連句会 歌仙三卷 捌・文 東 明雅 大窪瑞枝 下坂元子 24

興流連句会 二十韻一卷 膝送り・文 馬場彬風 27

柏連句会 二十韻一卷 捌・文 久保田庸子 28

雁帛往来 29

新刊紹介 28

表紙 (木曾駒) 宮崎龍火子

芭蕉の後継者たち

南 柏 雑 記 26

雅

「はいかいの継句をまなばんには、まず蕉翁の句を暗記し、付三句のはこびをかうがへしるべし。三日、翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし」(俳諧の付句の方法を知るには、まず芭蕉翁の句を暗記し、付方・三句の転じ方を考え知らねばならない。三日も芭蕉の句を唱えないと、口の中に次が生じるであらう)

右は蕪村が安永五年に刊行した「芭蕉翁付合集」の序文の一節である。主として七部集の芭蕉の付句を抜き出したこの本は、芭蕉俳諧の神髓を知らしめようとしたもので、いかに蕪村が芭蕉の俳諧に傾倒していたかを端的にあらわすものである。

蕪村だけではない。彼の門下すべてが、芭蕉俳諧を最上とし、その復興をもって自己の使命と考えていたことは、蕪村のあとを襲いで三世夜半亭を名乗った高井几童などに最もよくあらわれている。安永五年当時、蕪村はもう還暦

を過ぎた六十一歳の翁であったが、几童はまだ壮年の三十六歳である。私はひそかに、この「芭蕉翁付合集」は几童その他の夜半亭の俊秀が纏めたものを、蕪村が序文を書いて、監修という形にしたのではなかったかと考えている。蕪村は天明三年(一七八三)六十八歳で没したが、そのあと几童は、師の遺志を果すべく天明五年江戸に下って、「統一夜松」を編集し、師の旧友大島蓼太のすすめで、夜半亭三世を襲名し、翌天明六年には俳諧式目書の中で不朽の名著と言われる「付合手びき蔓」を刊行した。「付合手びき蔓」は付合の古い名目にあてはめつつ、作法・心得を説いたもので、別に私説として彼独自の斬新な説明を加え、旧師蕪村との両吟「桃李」などから多くの用例を出して、蕉風付合の実体を分りやすく説いている。

具体的に言えば、自他・体用・人情・景気の区別をきちんと立てて、一卷を綴る方式がここで確立されているのであるが、彼もこの書の序文で言っているように、俳諧の道は単に本を読んだだけでは分からぬことが多く、すぐれた人に出会って、席をかさね議論を聞いて、惑いを解き、その後自分で会得してはじめて、俳諧を知ることができるのである。彼が寛政元年(一七八九)四十九歳で没した後は、夜半亭の正統は絶えてしまった。もすこし、長生きをして、有力な後継者を育ててくれたならばと、いつも惜しみ思うことである。

「鶯の羽も」の巻 鑑賞 (VII)

東明雅

火ともしに暮れば登る峯の寺

ほととぎす皆鳴仕舞たり

芭蕉

(夏。ほととぎす。人情無)

(現代語訳) 日が暮れると御燈を灯しに山上の寺へ参るその道で、よく時鳥が鳴いていたが、今はもうその時節も過ぎたか、すっかり聞けなくなってしまった。

(付心) 遣句其場の付。また時節の付でもある。

(付味) 前句の寂寥孤独の感じが、付句の時節の過ぎ去るのを歎く気持とよく匂い合っている。

(転じ) 打越が冬の北風の寒さであるのに対して、付句は夏の終りの時鳥で、ここに大きな転じがあり、気分も打越・前句にはきびしさがあったが、これは句調も軽く、気分のびやかになり、余裕が感じられる。

(補説) 遁句とはこの句のように、会釈とほとんど同じだが、会釈よりもいっそう軽い句を付けるのをいう。人情の句が続いて一巻の進行にねばりが出てきた時、あるいは前句がきわめて難句で付けにくい時などに、時節・時分・

ほととぎす皆鳴仕舞たり

瘦骨のまだ起直る力なき

史邦

(雑。人情目)

(現代語訳) ひところ盛んに鳴いていたほととぎすも今はさっぱり鳴かなくなったが、長患いに瘦せおとろえたこの体は、まだ起き直る力さえない。

(付心) 起情。

(付味) 前句の「鳴仕舞たり」という感傷の余情が、病後の気力なさを「まだ」：「なき」という詠嘆に移っている。移りの付。

(転じ) 打越の釈教の句が一転して病態の句に変えられ、また、戸外の景から室内に変わっているところも、転じとして大きい。

(補説) ほととぎすは杜鵑と言い、また、蜀王の伝説に

時宜 七名八体の中の八体の一つ。「時」は年(時代)・月(季節)・日(その日)・時刻(その日の時分)といった時間を表し、「宜」はその時やその折の場にふさわしいことをいう。時節や時分が時間や場所とするのに対し、時宜は前句のその折の風俗や出来事に目を付けて、その時を勘案しながらその時の場に合った状況・状態・条件などをもって付けるところが異なる。これは、発句に脇句を付けるときに、その時その座の挨拶の意を込める辞儀とも通じ合うものであるが、時宜の一部として辞儀は含まれるも

天相・時宜などの言葉で軽く受け流すものである。遁句を作るのは一見たやすいように思われるが、この句のように適当な場に適当な遁句をすることは極めて難しい。この巻には既に裏の六句目に「芙蓉のはなのはら／＼とちる 史邦」というすばらしい遁句があったが、この「ほととぎす……」の句は、表面はただ何事もなく軽く言い捨てているようでありながら、裏には無限の余情がこめられている。このようにすぐれた遁句がところどころに嵌めこまれているのも、この一巻の気分を転じ、巻面に変化を与えた第一の要素である。

人情の有無を考えてみると、打越「雪けにさむき嶋の北風」が人情無、前句「火ともしに暮れば登る峯の寺」が人情目、それにこの付句が人情無であるから、人情目の句を人情無(場)の句で挿んでいる形であって、このように人情の句を一句で捨ててすぐまた人情無にすることは現在では嫌われているが、「猿蓑」のころはそのような嫌いはなかったようである。人情無の打越を嫌うのは、先に述べた北枝の「付方自他伝」が作られて以後のことであった。

基づいて、不如帰・蜀魂とも呼ばれるが、さらに冥途鳥・無常鳥などとも言われ、死、あるいは病にも関係が深い。ほととぎすはまた、勸農鳥・田うえ鳥とも呼ばれる。「七部婆心録」は、「前句ほととぎすの朝な／＼鳴て、農事を勤しも余所に聞て過し体と見立、長病人の懐を述たりやせ骨に未起直る力なきトハ、既に植付も仕廻田草とる時に臨たれど、我は仕事も得せず只喰めてと気をもむ老人の様也」とのべ、近代の注にも、これに類する説を出している人が居るが、そこまで限定しない方がよい。

ここで、雑の句になったのは、前句の夏を一句で捨てたわけである。夏・冬の季語は二句続けるのが多いけれども一句で捨ててもよく、また三句までは続けてよいことになっている。さらに、人情目の句の打越である。この現象については、名残の表折立と三句目との関係について述べたのと同様である。

の、時宜を辞儀と同義に考えるのは過りである。いずれにせよ、前句に添うように軽く付けられるもので、多く会釈であると言える。各務支考は「今日も浮世の晩鐘を聞く／＼五月雨の美濃恋しくも旅に居て」(「東西夜話」)を証句として示している。これは「今日も」から連日降り続く五月雨や同じような状況にいる旅を想定し、「浮世の晩鐘」から鬱陶しい梅雨の夕方に思う旅中の感懐を導き出して付けたものである。(連句辞典)

校合報告

鈴木春山洞

半歌仙 秋 麗

春山洞 捌

- 1 連れだてる二人ゐる秋麗かな 春山洞
 - 2 昼月淡き団地公園 柚平
 - 3 吾亦紅床の間の壺活け替へて 郁子
 - 4 クレオン描く「かあさんのかほ」 千町
 - 5 ガラス戸に音たて火取蛾ぶつかれる 平
 - 6 一桶買ひし銘水を注ぎ足し 洞
 - 7 只管打座碧眼の僧まだ若く 町
 - 8 ビデオテープの貸し借りが縁 郁
 - 9 誘ひ出す口笛メロディ聞き馴れぬ 洞
 - 10 外せし指輪どこに置きしか 平
 - 11 歴史今東西の壁壊したる 郁
 - 12 酸性雨に枯るる森林 平
 - 13 半月に兔の耳の立つ見えて 町
 - 14 将棋さしたへ酒酌み交はし 郁
 - 15 越天楽舞の姿のこもごもに 平
 - 16 神憑りたまふ舟の霞める 洞
 - 17 山峡の入生田に咲く花枝垂れ 郁
 - 18 八一の雛の歌は仮名文字 町
- 平成元年十一月十三日
於 柏市光ヶ丘近隣センター

と4かあさん(ん)の尾形打越の障りに気付いた。次は、歴史仮名遣の中に現代仮名遣・話し言葉・幼児語の混入という問題である。小学校の低学年の教室の後壁に貼り出されている「かあさんのかほ」顔・顔である。そこで「かあさんのかほ」を挿入した。がここでの問題点は2団地公園(名詞)とかほ(顔・名詞)の打越である。今は、どうしようもない。

- 5 原句・大玻璃戸音たて火取蛾ぶつかれる。
佳句である。前句のカタカナ言葉を受けて「ガラス戸に」と平凡な表現に直した。「大玻璃戸」の持つ高い俳諧性を失ったことは痛いがおだやかに運ぶ表六句の意図は護られたのではないだろうか。
- 10 原句・外した指輪どこに置きしか。
上五(外した)は口語表現であるので、文語表現に改めた。捌の見落しである。御容赦下さい。
- 11 原句・歴史今東西の壁壊さるる。
現在(今)を中心に詠えば「壊さるる」の表現が佳いのは事実である。が、歴史的現実感を詩として客観的に詠いとするためには、現在完了の助動詞「たり」の連体形「たる」の使用もあってよいと考えた次第である。
- 13 本巻には動詞「たつ」の語を三回使用し、ここ13で漢字「立つ」を使用している。実際は減らしたが、暫くこのままにして置こう。
- 15 原句・越天楽舞の姿の眼ナ底に。
佳句である。思わず息を呑んだ秀句である。すばらし

「文台ひき下ろせば反故」を是とする意見が「連句研究」に公表されているが、これは異を唱えるに過ぎないと思う。古来、連句に開かれた「校合」の道は、素晴らしく尊いものである。連句が捌の文学と呼ばれる所以もここにあるので、「文台ひき下ろせば反故」を是とする考えは、捌の校合作業の放棄を意味するもので、「連句」の文学性・詩の否定に繋がるものと思ひ賛成出来ない。

従来、連句の発表作品は、全ての作業を水面下に沈潜させて来た。それはそれで良い。変更させる必要はない。しかし仲間内では、一座を形成した連衆の間ぐらいいは、話し合っても良いものではないだろうか。後学の老書生で田舎で燻っている者としては、これを機会に御教導ねがいたい気持の方が強い。宜しく御願ひします。

1. 発句・原句木の下に二人ゐる秋麗かな
発句が、ぐらぐらするのは見苦しい。捌を仰せつかって瞞目の句を提出した。敢えて句帖の句を避けた。第一変更は17の付句を得て、上五を「連れだてる」と捌の立場から変更した。「木」と「枝」と隔ってはいるが「近さ」を感じた故である。中七「ゐる」を「ゐて」と変更したのは、全く春山洞好みである。しかし懸念がない訳ではない。「て」の持つ中止感によって二段切れの恐れが生じるのではないかの点だ。

4. 四句目・原句クレオン描く顔はかあさん。
これは捌きの中で直した句である。しかし此句の原句の素晴しさを、校合しながら発見した。先ず2公園(ん)

い一句ではある。ここで我が儘を言わせていただくと春山洞は「全巻同字去り」の立場を堅持しているので、7「碧眼」と訓みは異なるが同字であることを、後になって発見した。懊悩した。7とは隔っているし、訓み方も異なるし、可としてもよいと思つたが、敢えて、一直を試みた。前句との付合を重視して。

16 原句・神憑りたまふ舟のたゆたひ。
前句の素晴しさに触発された。が半歌仙(愛媛)は、「花」を含む春季三句を規定しているので、敢えて、季語「霞める」と挿し替えることとした次第である。

後記

会席の端に寄せていただくつもりで楽しみに出席した当てが外れた。お捌を仰せつかった。戦慄に似た緊張感が走った。腹をくくって坐る。猫養会の素晴しさは捌の治定まで付句が出続けることである。それと付合の具合が「詩」として、びしっと定まっていることである。小市民的雰囲気詠った発句に出発して、古今・東西・地球的視野に立つての諷詠は爽やかであった。何もかもが斬新で、俳諧冥利につきる思いを深くした。柚平先生の尽きることなく、次々と繰り出される、息もつかせぬ付句の妙には感嘆した。そして後学の捌に対して、適切なアドバイスを与えられた。それは厳しい愛の鞭と有難くいただいた。座の中で交わされた雑談も楽しく明雅先生の御高配有難く勉強させていだいた一日であった。

鉋の刃の砥ぎ方 式田和子

二十韻暮の市(初稿) 和子 捌

- 1 見し人も声かけずなり暮の市 健 悟
- 2 裸電球揺るる寒風 守 男
- 3 箱の猫子等次々に抱き上げて 隆 一
- 4 九文三分の靴きつくなる 和 子
- 5 金星の蝕のかりし月仰ぐ 文 夫
- 6 逢瀬最後と酌みし中汲み 悟 夫
- 7 若い娘にグットバイされ美術展 夫 男
- 8 アブストラクト眼鏡取り替え 一 男
- 9 帆船のきらめき競ふ入海に 夫 男
- 10 天道虫はいきなりに飛ぶ 悟 男
- 11 夏やすみ御岳詣では老父を連れ 同 男
- 12 ウォークマンの音もしぼりて 同 男
- 13 壁越しに囁く気配誰ならん 悟 男
- 14 逃げた夫につひに欄まり 同 男
- 15 こんにやくを並べて干して寒の月 一 男
- 16 ぎっくり腰と仲の良き日々 一 男
- 17 長距離のトラックの行く轟々と 夫 男
- 18 お玉杓子の水のこぼれる 夫 男
- 19 角帽の記念撮影花万葉 一 男
- 20 おめでとうさん囀りの中 夫 男

3 十軒の商店街に客なくて 照敏
 が頭に浮んだ。寒い風に重点を置くか、裸電球にウェイトをかけるかを考えたが、この「山茶花の巻」の2-3を、3-2と読んでみて、裸電球がポイントだが、風の働きにも場を与えても良いように思われたので「揺らす北風」で治定し、「る」の並ぶことを避けた。

4 この付は、猫を抱く子を兄弟と見立て、そのうちのひとりの会釈で、小学生でも大きい子もいて、親が「エ、もうその靴はけないの」とびっくりするくらいだ。まだ無邪気な子供だという気分を出したかったが、靴ということとで、発句外、脇外。3で内に入ったのがまた外へ出てしまったのは作者の未熟なためである。「窮屈になるおさがりの服」では、さがるが裸電球のぶらさがっている気分にかかると。「躰出して着るジャージの服」では表四句に面白過ぎよう。1・2の剛に対して、3・4は柔で軽みのある展開を望むので、向付で親を出し、3の子供をひとりからませ「糸を通して重宝がられる」

5 脇に裸電球を治定したときに、さあ、月はどうしよう。裸電球が光ってしまうし、夜になるので、第三に冬で月を出そうか、とも思ったが、内に入って、冬で、月で、人情を入れた句を出してください、といっても無理な相談なことは分っているし、冬三句は二十韻では重すぎる。5の月をこぼしても良いが、初心の方にはこの辺りに「月」と始めは覚えられたほうが良いと判断して、月をお願いする。脇の「風」からは天象二句去りで式目に合っている

捌きをするときは、自・他・場は注意しつつ治定し、連衆も口々に意見をいい、打越し、四・三なども気を付けながら巻くが、それでも校合のときには多くの欠点を発見するものだ。いつもは、一応校合した作品を連衆の方々に送り、ご意見ご希望があればお申し出戴きたいという葉書を同封し、それを参考に(必ずしもその通りにはしないが)、最終稿とすることになっている。当日の連衆は、佛淵健悟氏がACCで約十カ月。近藤守男氏が四宮で三回くらい経験。若松隆一氏、木場田文夫氏はまったく始めてという構成なので、校合は先生のご示唆と、佛淵氏の意見を踏まえるだけにした。初心の方には膝送りで「こんどはこれを」という方法もあるが、連衆揃って少壮の男性なので、全句競って考えて載きたいと思ひ、出勝にし、連句の約束事などは一句ずつ説明しながら出句を待った。従って力不足なのはやむを得ないと思うが、それなりに首尾するための捌きの考え方、また校合の結果どの程度鉋がかけられたか、ご参考になれば幸である。

- 3 原句 「箱の猫子等次々に抱き上げて」
 「子等次々」より「代る代る」のほうがより具体性が出、可愛い子供覗き込む姿が出ると思い一直し、治定したが、
- 2 裸電球揺るる寒風 と「る」が並ぶ。これは健悟氏案で「揺らす北風」と出た。この付け合ひは、明雅先生の「連句集 猫糞」(永田書房刊)の「山茶花の巻」
- 1 山茶花やむかし道中旅 時彦
- 2 初時雨来る土の冷え冷え 明雅

が、夜分は三句去りで二句しか去っていない。しかし、当日の興行が夜だったから、1・2を夜と見定めたが、裸電球がぶら下がっているだけなら必ずしも夜でなくても良からう。良い月が出た。新聞等では「金星食」となっていたが、どうしても感じが出ないのであえて「蝕」の字を使った。

9 原句 「帆船のきらめき競ふ入海に」美しい句が出た。8のアブストラクトの絵柄を判じようとする老眼鏡も俳味があって面白いが、それを拡大したらかくもあろうかという入り海の帆船の風景はこのまま採りたかった。5の月の句の金星蝕が月の雫のように美しくきらめいているのを相殺する懸念がある。ヨットの帆柱があちこちに入り乱れているようにとよかろうと判断し、一直。「帆船のかたむきながら入海に」

10 次の天道虫は遺句、原句「天道虫はいきなりに飛ぶ」天道虫はまっ直に上へ上へと登る習癖があり、てっぺんまでいってパッと天を指して飛ぶから天への道の虫、天道虫という由、作者から説明があった。帆柱を天へ登るといふ景は、7・8の中年の哀感を吹き飛ばすような良い転じだが、いきなりに飛んでは登る動作が無くなってしまふ。案としては「天道虫は先へ先へと」これではそれからどうした! にならう。「天道虫はてっぺんを這ふ」でも、そこに到る道筋が出ない。結局「天道虫」のめざすてっぺんになった。

11 原句「夏休み御岳詣では老父を連れ」てっぺんから来て良い付味と思っし起情の句にもなっているが、「夏

休み」は子供くさいので「夏期休暇」と一直。御岳をみたけと読めば原句と字数が合うが、作者に尋ねれば木曾という。木曾なら御嶽。おんたけである。字数を合わせ「夏期休暇御嶽詣で老父を連れ」で治定した。

12 御嶽詣でなら「六根清浄」と唱えるのが常道だが、家族揃っての御嶽詣でについて来た息子は若者の常として必需品のウォークマンでロックなど聞いているだろう。祖父に遠慮して「ウォークマンの音もしぼりて」と音楽を出した。止は「て」か「ぬ」か。息子とせず一緒に登っている若者連も音をしぼっているだろうと考えれば「ぬ」では限定されるのであまいさを残した。

14 ウラの恋句はグットバイされているので、ナオの恋はもう少し情緒纏綿として欲しいと注文を出し、13でうまく転じて秘やかな恋の場面が出た。14は、それが誰だろうという謎解きとなるが、意外性もありまた、現代風の味もある恋が出た。作者は句意からいって、「逃げ来し夫に」のほうが良いのでは——と意見があった。逃げた夫では逃げたが夫にかかる。「逃げ来し夫」にすれば主客ははっきりするし、意味の通りは良いと思ったが、情痴の俗っぽい響きを生かす語呂のほうを採った。「逃げた夫につひに纏まり」そのまま。

15 5の月も自、この月も自の句になってしまったが、5は下から仰ぐ月。15は上から光を浴びている月と変化しているのが治定。月の字も下に並はずよかった。ここで、「寒の月」としているのので、2を北風ににしたのが正解である。

外食々堂で食べた蛸味噌汁の香をちょっと残している運転手その人の付けと見てもよいと思ったが、19との付け味がまだ疑問だろう。後句で、15の田舎の気分を残してしまつた17から、やや都会風に転じ、大学校庭とも見立てられるため後句を採りたいが、15にこんなにやくがある。「子持ち雀のちよつと飛び退き」これはすりつけているから飛びのいてもよかるうが付き過ぎか。「孕み雀の混る一群れ」これで少々離れ、トラックの通る道から、校庭へ見立替えができると思う。治定。

20 「新人ばかりでも約三時間半くらいで一卷首尾しそうですね。おめでとうさん」と健悟氏が云い、それが文夫氏の「おめでとうさん囀りの中」とついた。しかし、発句に「声」という字がある。ここで「囀り」を使うと遠輪廻になり兼ねない。おめでとうに何がつか。幸い「清明」が付いて、日にちの頃合いも良く「おめでとうさん時ぞ清明」めでたく首尾した。こういう発句は捌きの好みでもある。

私自身の校合の方法は、先生にお習いしたことを幽かになぞっているに過ぎない。「玉が転がるように」というお教えには何度も口に出して読んでみるのがいいが、字の重複などはそれだけではどうしても見落してしまう。ノートに書いたのを清書することによって発見する率も高いが、ワープロを使うようになって、仮名を転換して字を探すので「オヤ、この字は転換したナ」と気がつく率のほうが高い。「舌頭千転」も一法だが、それと併用して「書写百辺」も校合の鉋の刃を砥ぐのに効果があるのではないだろうか。

17 花の近くには、高いもの、色の濃いもの、光るものは採ってはいけなさと人にも云い、自分も固く守っているのに、この句をふらふらと治定してしまったのは我ながらあきれた話である。いつも女性の多い席では絶対にこの句のような地響を立てて街道を轟進するような句は出ないの、何とかこの中上健次の「日輪の翼」というダイナミックな小説のような句が使えないだろうか。トラックを満艦飾に飾っては、9で帆船のきらめきを消した甲斐がないと深く反省。ここは述懐の句を出すところだが15・16が述懐気味の老体病体なのであえてそれは狙わないが、ナウの折立に勢の良すぎる句を出すのは遅すぎるかとも思ったが、15・16の湿った気分を転じるには使えるだろう。原句の、「て」止は3・12・17と三つあるのは多すぎる。ここで「て」をひとつ消すことも必要だ。音は四句去っているし、車も出ていないから「長距離のトラックの行く轟々と」ではどうだろう。しかし、14・「逃げた」と「行く」が歩行体で大打越となるか。「長距離のトラック続く轟々と」同じ風景ながら、言葉での打越しを避け、更に男臭くなった。ぎっくり腰は職業病と聞く。

18 原句は街道筋で子供の飼っているバケツの中のお玉杓子の水がゆれてこぼれると解し治定したが、次の花への付味が疑問であるとのご指摘があった。19の花は、ご当地早稲田の角帽を付けている。「蛸汁の香ほのと漂ふ」「子持ち雀の拾ふパン屑」前句なら地方の町でひとりだけ早稲田に入学した男の子の家のあたりと見立ててもよく、また

二十韻 暮の市 (決定稿)

- 1 見し人も声かけずなり暮の市
 - 2 裸電球揺らす北風
 - 3 箱の猫代る代るに抱き上げて
 - 4 糸を通して重宝がられる
 - 5 金星の蝕のかかりし月仰ぐ
 - 6 逢瀬最後と酌みし中汲
 - 7 若い娘にグットバイされ美術展
 - 8 アストラクト眼鏡取り替え
 - 9 帆船のかたむきながら入海に
 - 10 天道虫のめざすてっぺん
 - 11 夏期休暇御嶽詣で老父を連れ
 - 12 ウォークマンの音もしぼりて
 - 13 壁越しに囁く気配誰ならん
 - 14 逃げた夫につひに纏まり
 - 15 こんにやくを並べて干して寒の月
 - 16 ぎっくり腰と仲の良き日々
 - 17 長距離のトラック続く轟々と
 - 18 孕み雀の混じる一群れ
 - 19 角帽の記念撮影花万朵
 - 20 おめでとうさん時ぞ清明
- 平成元年十二月十八日
於 卯の花連句会

文和隆守健

夫一男夫一男同悟同男悟一男夫悟夫一男悟

校合の過程 坂本孝子

歌仙 聖夜なる (決定稿) 孝子 捌

平成元年十二月二十五日
於 四宮集会所

- 一 風狂や連句をまいて聖夜なる
- 二 ポインセチアの燃ゆる紅
- 三 落葉踏むタクシー待ちのしんがり
- 四 犬に引かれて歩く飼ひ主
- 五 新築の月にかがよふ陶瓦
- 六 栗のおこはに胡麻塩をかけ
- 七 おさげ髪数珠玉に糸通しをり
- 八 エリックサティの好きなあの人
- 九 抱きつけばピアノ鍵盤パンと鳴る
- 一〇 おどろおどろの蔵の薄闇
- 一一 玉虫の厨子に涼しく月さしぬ
- 一二 ひらく扇に誰が描きし鯉
- 一三 バザールに客呼ぶ声も秋近く
- 一四 名もなき草の伸びる裏庭
- 一五 内閣の支持率のやや落ち目なり
- 一六 本醸造は生のままで飲む
- 一七 羽衣を謡ひて帰る花の下
- 一八 オール流して休むレガッタ

瑞枝 孝子 健敏 好敏 和遊 孝子 健敏 好敏 和遊

- 一九 油まぜ土間に片寄る野菜屑
- 二〇 先端機器を手内職して
- 二一 純金の鎖ぶらぶらら息子
- 二二 エイズ登録知らぬ間に済み
- 二三 楽屋入り恋の疲れを目の縁に
- 二四 嬉し恥づかし緊縛の秘戯
- 二五 雪催ひ鳥の子紙のしつとりと
- 二六 水仙匂ふ房州の海
- 二七 地響きのダンブ街道父老いて
- 二八 奉納相撲に勝った遠き日
- 二九 お月見の支度出来しと声をかけ
- 三〇 貫ひし猫はまたたびに酔ふ
- 三一 読みふける恩師校本西鶴忌
- 三二 かかあ天下で亭主閣白
- 三三 とんでんかん鍛冶屋の槌の調子よく
- 三四 膏葉の痕搔いてのどけし
- 三五 山里は花にまぎる湯のけむり
- 三六 またたき潤む春の灯火

洋 孝子 健敏 好敏 和遊 孝子 健敏 好敏 和遊

四宮の連句会は午後六時開始、同九時閉館である。正味三時間、日頃は二十韻を巻くの丁度よい。暮の二十五日、今年最後の連句会なので思い切って歌仙を巻く事になった。捌の他に連衆五人である。途中和子さんは抜けて別席の二十韻に参加、そちらが満尾してから又本席に加わって下さった。巻き終って読み返せば当然ぎくしゃくとしている所が多く、何とか付味を整える可く校合を試みた。その過程をここに記してみたい。

起句は互選。イウだというのに街騒をよそにして連句の座に集った方々の一致した感慨であろう。

脇、原句 ポインセチアの燃ゆる赫々

一直 ポインセチアの燃ゆる紅

聖夜に対してポインセチアは誠に結構だと思うが、赫々の文字はいかにも硬い。紅(くれなる)の方が起句の風狂人の心にもポインセチアにも優しい。

第三原句 落葉中タクシー乗場列なして

一直 落葉踏むタクシー待ちのしんがり

第三は大きく転じる事が大切だが、やはり読者を頷かせる微かな付心が欲しい。前句の「燃ゆる紅」に対し、列のしんがりで落葉を踏む切ない気分一直。又起句に「巻いて」とあるので、第三ので止めは具合が悪かった。

四原句 三匹の犬引いてゆく人

一直 散歩の犬に引かれゆく人

其場の付。四句目として軽く俳味があり結構だが、三匹にこだわらなくてもよいのではないかと、作者と相談して一

直。原句もよかったと思う。

七原句 数珠玉に糸通しをりおさげ髪

一直 おさげ髪数珠玉に糸通しをり

唯黙々と数珠玉つなぎをしている少女。前句と合わせると初潮を迎えた頃の事とも思える。思春期のもの思う姿を印象付ける為に「おさげ髪」を上五に据えた。

八原句 サティイが好きと話弾んで

一直 サティイが好き少年も好き

治定 エリックサティイの好きなあの人

七で折角少女が出たのに、八の原句では恋の気分が薄い。それで一直したが、サティイが流行の音楽家である事を一般に理解させる為には、エリックサティイとフルネームにした方がよい。又数珠玉つなぎの少女の心の中では「少年」より「あの人の方が素直であろう。ここで「人」の文字を使ったので、表に戻り、

四治定 犬に引かれて歩く飼主

「人」が飼主になり、次の五句目、新築の家に対する付心がはつきりしたかと思う。

十一原句 玉虫の厨子にとどける月涼し

一直 玉虫の厨子に涼しく月さしぬ

「玉」の字、八の数珠玉とは同字だが三句去っているのて頂いた。但し月光が「とどく」の表現がやゝ無理なので一直。尚、玉虫は夏の季語だが、玉虫の厨子では夏にならぬ事一座の話題となった。

十二原句 煽ぐ団扇は深水の鯉

一直 開く扇に誰が描きし鯉

前句玉虫の厨子の余情に対して「团扇」より「開く扇」の方が付味よく、八でエリックサティイと言う人名が出ていたので、深水（伊東）は出さぬ方がよい。又絵の作者が知れぬ方がかえってゆかしいとも言える。

十三原句 サンパンを操る背は汗に濡れ

一直 サンパンを操る背も秋近く

こゝで外国の民俗が出た。サンパンを操るのは水上生活者。前句とは向い付である。但し「汗」は三夏であり、夏三句が続いて皆三夏では曲がないので、「秋近く（晩夏）」と一直。十八 オール流して休むレガッタ

花の句に付くこと大変結構な折端であったが、うっかり十三の「サンパン」と差合う事に気が付かなかった。十三・十八のいずれを直すか悩んだが、十三をやはり外国の民俗で十三再校 シクロこぐ男の背も秋近く

シクロは戦後の日本にもあった輪タク様の乗物。しかしこの巻は他にも乗物の句が多く、又東南アジア地方に「秋近く」と言う季節感があるかどうかも疑問なので

十三治定 バザールに客呼ぶ声も秋近く

十四原句 貧乏草の伸びし裏庭

一直 名もなき草の伸びる裏庭

十三「バザール」と十五「内閣の支持率」の中に「貧乏」が入ってはあまりにも転じが無いので一直した。

二一原句 純金の鎖をかけるドラ息子

一直 純金の鎖ぶらぶらト息子

付。前句の余情をひたと押さえて見事な恋ばなれである。

二六原句 水仙匂ふ安房の崖ふち

一直 水仙匂ふ房州の海

この日洋子さんは別席であったが房州のお土産に香り高い水仙の束をお持ちになり、一座の皆さんに分けて下さった和子さんの発案で捌が付けさせて頂いたが「崖」の文字は不要。その方がかえって二七の「ダンブ街道」が引き立つたと思っ。

二八原句 相撲取りには辛き番付

一直 奉納相撲に勝った遠き日

この辺で制限時間が気になる。相撲は秋の季語だが、今は一年に六場所もあり、原句のままでは季節感が生きない。丁度神祇の句も出ていなかったし（起句はキリスト教）述懐の句としても適当な場所だったので一直した。

二九 お月見の仕度出来しと声をかけ

前句の述懐に対して実に佳い句を出して頂いたが過って表の月を見ると

五原句 新築の瓦を照らす望の月

となつている。お月見も勿論仲秋の満月。一卷に名月が二つ出るのは差障りあるのだ

五治定 新築の月にかがよふ陶瓦

三〇原句 貰ひし猫は木天蓼に酔ふ

一直 貰ひし猫はまたたびに酔ふ

三二の「かかあ天下」と「天」の字打越

三四原句 搔きて長閑けき膏葉の痕

先ず折立十九から声を出して読んでみると、「土間に片寄る」「鎖をかける」が打越にあり、こまかい様だが、舌頭に千回唱えるまでもなく直し度くなるのである。又「ぶらぶら」で、ドラ息子の生態も伺える様に思っ。

二二原句 ひそかに進むエイズ登録

二三原句 目の縁の隈を気にして楽屋入

二四原句 人には言へぬ縛り方され

右三句並べて見ると二二「ひそかに」二三「人には言へぬ」これも同意語の打越である。

二二、一直 エイズ登録知らぬ間に済み
ここで問題なのは、原句では一つの社会現象で場の句としてとらえられていたのに、一直した為に前句ドラ息子のその人の付となつてしまい、付味がやゝ粘ったうらみがある。

二三、一直 楽屋入り恋の疲れを目の縁に
原句の「目の縁の隈」で恋の情態を感じさせなくはないのだがここではそれが情事の疲れであると言ってしまう、明るい感じにし度いと思つた。

二四、一直 嬉し恥づかし緊縛の味
治定 嬉し恥づかし緊縛の秘戯
この句は作者から一直を申し出られた。原句の唯異常さを投げ出した様な興味本意の表現より、「嬉し恥づかし」という心理を表現した方が勿論面白く又しおりがあつてよろしいが、捌としては「味」ではなく「秘戯」として置き度い。いずれにしても捌が戸惑うばかりの恋の山場を作られた作者に敬意を表する。更に二五の句、流石にベテランの

一直 膏葉の痕搔いてのどけし

原句はカ行の音が耳に障るので、下七を頭に据え、音便と終止形で調子をやわらげた。

三五原句 墨色の稜線花の雨あがり

治定 山里は花にまぎるる場のけむり

一卷眺めて見てまだ出ていないものは山であった。しかし天象は「油ませ」（これは起句の風狂の「風」に障らぬ様苦勞した佳句である）や「雪催ひ」があるので、わざわざ花の句で雨を降らせる必要はなかった。前句の膏葉にはいささかベタ付だが、右句に治定した。

三六原句 霞を渡る長き鐘の音

治定 またたき潤む春の灯火

三五と同様「霞」は不要だし、「鐘」は三三鍛冶屋のと同てんかんにも障るので右の通りとした。

はじめに述べた様に、この巻は時間の制限があつたので、かえって連衆の気分が集中したとも考えられる。捌がぼんやりしていると、新人もベテランも次々に楽しい発想を示して下さるので本当に助かった。殊に名残の裏に至っては、ほとんど待つ間の無い程の速さで短冊を出して下さるので、又校合に就いては、巻き乍らその場で直した部分もあり、後日考えに考えて直した句もある。飽目を取るといふ言葉に従い、随分あちこちに手を加えたが、出来るだけ作者の意図に逆わぬ様、心がけた積りである。そして結構珠が転んでくれたのではないかと思ひ、改めて連衆の皆様感謝している。

菘虫

付勝練習二十韻
東 明 雅

投句締切
4月20日

- 九句目バザールに水煙草吸ふ男たち
- 十句目 すこし疲れて美術館出る
- 治定 見上ぐれば摩耶のあたりに雪しまく
- 1 見渡せば遠山なみに冬霞
- 2 東山静かに眠り京の町
- 3 枯木立陽の射す広場鳩の群
- 4 冬の雨びしよびしよ降つてゐたりけり
- 5 なだらかな翠黛めぐる鶯の円
- 6 鶯来るいつもこの場所この時分
- 7 鷹ひとつ吹きしぼらるる巖あり
- 8 冬晴の煙突煙真直に
- 9 迎へくる母の免許のま新し
- 10 寒林の心なぐさむものもなし
- 11 間近なり冬鶯のこゑしきり
- 12 南天に通ふ鶉あまたたび
- 13 またたきの睫毛虹なす寒落暉
- 14 築山の向ふ道あり玉珊瑚
- 15 一面の枯芝の色麗しき
- 16 道先へ先へと移る尉鶉
- 17 餌まけばすぐに集まり寒雀
- 18 磨かれて貴石減りゆく夕茜

良子 正雄 妙子 千雪 千子 信子 澄子 典子 健悟 美鈴 治子 智子 達子 美和 よしえ 道郎 雅代

19 逆光の水に潜ぎて場 謙太郎
 20 粉雪のはがるごとく降りしきり あかり
 21 石焼薯車ゆっくり流し居り 徹
 22 冬嵐の初島しかと小手のうち うせい
 23 池の鴨驚くばかり増えてゐし 雄次郎

今度の付句は、前号に記したように、人情自・場の句であり、雑または冬の句であれば何でもよい。応募された二十余篇の付句は、すべてその条件に叶ったものであり、十七字の中にいろいろの付心が示され、それに従つてさまざまの情景が展開され、読んでおもしろく飽きることがなかった。付味・転じもそれぞれによく考えられており、極端に言えば、どの句を取つてもよいと思われれるもので、一つを選ぶのに大変苦労した。

いわば、全部合格であるけれども、その中から一句選出するには、それ相応の根拠がなければならない。まず、前句は美術館を見た人の疲れであり、打越もバザールに水煙草を吸っている男たちのいわば無気力な生活を写し、この二句には何かダルな気分が通じている。今度の付けは三句目の転じで、この気分から抜け出すことが肝腎であるとともに、付味としては前句の美術館の位に応じたものが欲しい。この二つの条件を完全に満たしているものを私は選びたかった。もちろん、この条件が絶対だとは言わない。これは私の主観的な主張である。しかし、すくなくとも、付句選定の条件の一つになることは確かである。

右の条件を参考にして選定してみると、①の冬霞は前

▲句の位に依じているけれども、全体の表現がややおとなしすぎて、打越・前句の気分から十分に転じ得ていないように思う。②もその点似たりよったりである。③は鳥を出して一巻の模様に変化を付けようとする着目はよいが、何か俳句の三段切れに似た表現が気になった。④付味・転じともに不十分である。⑤この句は素晴らしかった。まず翠黛(山の中腹)という語が美術館と位を同じくし、鶯で新しい題材を出し、気分も晴やかで転じが利いている。ただ一巡をなるべく守りたいので断念した。⑥鶉は付味はよいが、時・処いつも同じではマンネリで気分が転じがない。⑦鷹は位があり、表現にも働きのあつてよい。ただ、このようないわば空想上の鷹が、前句の現実にかどうか疑問である。⑧付味・転じ、ともに十分でなく、平凡である。もちろん、平凡な句がよい場所もあるが、ここではすこし変化が欲しかった。⑨「気分を引き上げたい」と思つて付けられたのは賛成である。ただ付味(位)の方がいかである。⑩冬嵐は位もよいし、表現も活気があつてよいが、「り」という音の重複が気になった。⑪これはいささか離れすぎで、付味も転じも不十分である。⑫これは位も転じも十分である。ただ強いて言えば、美術館で働いたために瞬いても寒落暉が虹のように見えるのだとも解釈できないわけではない。これでは原因・結果になつてまずい。⑬玉珊瑚は位は合っているが、一句の表現が前句に遠すぎるような気がする。⑭一面の枯芝の景は美術館の位に合っている。こんな

突放したような句もおもしろい。⑯尉鶉が自分の行く先へと翔んで来るのは美しく、可愛い景色で、位もあり、気分の変化、転じも十分である。⑰寒雀はまあまあとしても、餌をやればすぐに集つて来るというのでは、あまり平凡すぎる。⑱この句はちょっと理解できなかった。貴石とは何か、翡翠みたいなもの、まさかダイヤモンドではあるまい。貴石を磨いているのは工場であろうか。あるいはその工場と前句の美術館を対付的に出されたのであろうか。そう考えると納得でき、おもしろいと思う。⑲美術館を出て上野の不忍池に立った景でもあろうか。ただ水という字が打越にあるのはまずい。池・沼いろいろ変えることができよう。⑳「はがるごとく降る」というのは、どのような降り方なのか、珍しい表現でおもしろいと思つたが、真意は分からない。㉑石焼薯では美術館の位にそわない。打越が水煙草であるから、食物を出すなら、もっと気の利いたものを出すべきであらう。㉒この句はすばらしいと思つた。冬嵐は美術館の位に依えているし、初島という地名も出てよいと思つた。しかし、よく考えてみると、この句第三に「海岸線波頭真白に月ありて」という句があり四句目にホバークラフトが出ています。遠輪廻になりかねない。㉓これも不忍池の景であらうが、平凡である。

治定の句、兵庫県立美術館がモデルになっているようだが、摩耶山という山の名もよく美術館の位に叶い、雪しまくも転じが利いているので採用した。次は、人情他の句か場の句。冬は一句で捨てても続けてもよい。

初 懐 紙 (雪晴れ)

氏原正雄 捌

花の句について

東 明 雅

雪晴の園かがやかに初懐紙
蓬萊盆を飾る床の間
楓揚に勇む子の頬緊まるらん
土手のをちこち摘草の群
月こがすまで山焼の炎あげ
たまの休みをピアノ弾きある
学者にて茶杓作りのお見事に
結城の外は身につけぬ女
蔭に寄り口紅のあとそつと拭き
葭蕀の脇に瓶のころがり
大と山羊に吾子の親しむ小旅行
アニメブームに乗って儲ける
帰るさの鍵穴に射す望の月
街の界限ただに露けく
つくるのも食べるもお好ききりたんぼ
しゃっくり癖がすこし心配
如意輪堂沈み吉野は花万朶
枝移りして鶯の声

正雄 綯網を引く男等の無精ひげ
杉亭 疎開幕しのいまだ馴染まぬ
雅代 遙かなる産土神に願をかけ
郁子 東西の壁やつと無くなり
治子 防寒の服に構へるレポーター
房利 シャム混ベル混可愛がる猫
郁 八時間の時差もものかはかき口説き
代 白黒黄色恋のお相手
治 故里の古城の趾は荒れしまま
亭 ひとり寝の夢銘酒名水
利 テレビ消し縁に出づれば月かかり
代 夜更けて高し庭の鈴虫
利 勤勉で実直に過ぎ桐一葉
治 和綴の本を徒に積む
郁 あかんべえして逃るわんぱく
代 足の蹴叩けば諸病癒ゆるてふ
治 散りつづく花片重く水の上
利 ぶらんこ鳴って長き夕暮

初懐紙 (雪晴) の巻

- 10^ウ しゃっくり癖がすこし心配
- 11 如意輪堂沈み吉野は花万朶
- 12 枝移りして鶯の声
- 4^ウ あかんべえして逃るわんぱく
- 5 散りつづく花片重く水の上
- 6 ぶらんこ鳴って長き夕暮

花に吉野また吉野に花を付けることには、昔から、いろいろ難しい説がある。花に吉野、吉野に花、どちらにしてもあまり平凡で月並だからである。これらが打越にあるのはなおさら悪い。しかし、一句の中に吉野と花とを詠みこむことは決して嫌わない。枝折の花が満開であるのに対して、匂い

初 懐 紙 (林泉の)

下坂元子 捌

初懐紙 (林泉の) の巻

林泉の雪かがやかに初懐紙
小鴨黒鴨群れてゐる水
クレンソウを添へし洋皿運ばれて
受験子の吹く陶のオカリナ
天窓にぼっかりにじむ臘月
柱時計のねち固く巻く
安永の織機守る嫁女在り
外出好きの亭主美丈夫
助手席の君の沈黙測りかね
ワンタッチであけ呷る冷酒
岬には大波小波打ちくだけ
難台叩き符牒飛び交ふ
月に笑むお地蔵様に掌を合はせ
金粉漉きし紙に栗飯
雌猫のモンローウオーク秋の庭
拗ねた唇ねだるお手当
花の陰鬼面の人は誰ならむ
先へ先へと蝶の舞ひ立つ

元子 ぼくぼくと婆と畑打つ午下り
麻子 のぼれば軋む納屋の階段
良子 銃声のアゼルバイジャン風さわぎ
よしえ 手術中なるランプ赤赤
徒司 冬眠の鱈を売る町の市
聖子 单身赴任ひたる柚子風呂
え いい人といはれることにくたびれて
麻 苛めてみたいあのお嬢様
良 「宮」に似し後姿の高島田
元 恋のてだれのタブー忘れる
司 月高く阿蘇のカルデラ列車行く
麻 寿切符早生蜜柑添へ
司 草の露払ひ祈りし屋敷神
聖 忘れ鉄が錆びてみつかる
良 オグリキヤップ観覧席のどよめきて
元 二つ三つ四つ淡き雲浮く
え 去年の道たがへ逢ひたる花大樹
網で掬へる乗込の鮒

元子 10^ウ 拗ねた唇ねだるお手当
麻子 11 花の陰鬼面の人は誰ならむ
良子 12 先へ先へと蝶の舞ひ立つ
よしえ 4^ウ 二つ三つ四つ淡き雲浮く
徒司 5 去年の道たがへ逢ひたる花大樹
聖子 6 網で掬へる乗込の鮒

の花は落花を詠んで変化をはかれたのは流石である。ただ、もう一步、両句の気分の変化も考えられたら最高だったと思うが、これは望蜀のことかも知れない。

